

発問の活性化

ニコぶラクダの授業展開

授業は、ある一定の時間の中で行われます。時間の決まったドラマのようなものです。ドラマ以上に厳密に時間を守らなければなりません。一単位時間の中で、いくつの発問を、どのような配列でセットするかが問題です。主発問は、一つか二つにするのがよいと考えます。三つにすると、三つ目の発問による作業がどうしてもつまり気味になります。

「ニコぶラクダ」の授業展開があります。ラクダの二つのこぶのように山場は二つということです。これは、主発問は二つと重なります。

問答法は指導の一形態でしかない

多くの教室で、教師が尋ねて子どもが答え、理解を確認しながら学習が進んでいくという展開が見られます。確かに、ソクラテスの対話法以来、真理探究の一つの方法として問答を通じた思考展開は有効な指導法として最も一般的な形態です。

このような形態の場合、一步進めて、その解答、発言についての根拠や理由などの説明を求めると口ごもってしまうというのによく見られる光景です。思考や判断を留保し、教師のもつ正解に自分の発言が適合しているかどうか子どもが関心事になっているわけです。ほとんどの子どもは、教師は正解をもっていて問題を出していると思っています。

書かれている内容を把握させて終わりというような正答主義的、結果主義的な発問では、話し合い活動が動き出す活発な授業にはなりません。そのような展開の問答法は、授業の一形態でしかないと考えるべきです。

形態には、組織的な側面と方法的な側面があります。一斉指導、個別指導、少人数指導などという使い方は、組織的側面から使われる形態です。問答法のような方法的側面から他の形態を見ると、例えば作業法、講義法などがあります。当然、目的とそれらの形態の効果を考慮しての関連になりますが、これらの側面を相互に関連させ、組み合わせるだけでも授業には多様な展開があることがわかります。

めあてをもたせ追究過程を豊かにする

子ども自身が、読みの学習材に主体的に関わる学習では、子どもに読みのめあてや追究の課題をもたせることが必要です。教師が、教材研究の成果を発問の形で考えておくことは非常に有効です。しかし、いきなりクイズ番組を始めるのではなく、サイドラインや書き込み、読み取りノートなど子ども自身が方法知として持っている関与力を発揮させ、そこから子どもの発見として位置付けるための手がかりとして懐にしまっておきます。子どもが、そうしてもった感想を闊達に発言できることから始めます。その共通点や相違点から、一緒に読みのめあてや学習課題をつくっていく学習に慣れさせます。子どもの読みの側から、全員に着目させたい価値ある課題が生まれてきます。このとき、考えた発問が生きています。